

やまなし

宮沢賢治

小さな谷川の底を写した二枚の青い^{げんとう}幻燈です。

一、五月

二疋の^{ひき}蟹^{かに}の子供らが青じろい水の底で話していました。

『クラムボンはわらったよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらったよ。』

『クラムボンは^は跳ねてわらったよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらったよ。』

上の方や横の方は、青くくらく^{はがね}鋼のように見えます。そのなめらかな
天井^{てんじょう}を、つぶつぶ^{あわ}暗い泡が流れて行きます。

『クラムボンはわらっていたよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらったよ。』

『それならなぜクラムボンはわらったの。』

『知らない。』

つぶつぶ泡が流れて行きます。蟹の子供らもぽっぽっぽとつづけて
五六粒^{つぶ}泡^はを吐きました。それはゆれながら水銀のように光って^{なな}斜めに上の方
へのぼって行きました。

つうと銀のいろの腹をひるがえして、一疋の魚が頭の上を過ぎて行きました。
た。

『クラムボンは死んだよ。』

『クラムボンは殺されたよ。』

『クラムボンは死んでしまったよ…………。』

『殺されたよ。』

『それならなぜ殺された。』兄さんの蟹は、その右側の四本の脚^{あし}の中の二本を、弟の平べったい頭にのせながら^い云いました。

『わからない。』

魚がまたツウと戻^{もど}って下流のほうへ行きました。

テキスト：https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/46605_31178.html

朗 読 (参考)：

<http://aozoraroudoku.jp/voice/rdp/rd037.html>

なぞなぞおぼけ

(日本の昔話)

むかし、むかし、お坊さんが一人、旅をしておりました。

ある晩、お坊さんは、旅の途中、山の中の古びた、荒れ果てた小さなほこらで休むことにしました。長い間、誰も気になかなかつたとみえ、中はほこりとくもの巣で覆われていました。

お坊さんは、夜中薄暗い明かりで目が覚めると、そばから変な声が聞こえてきました。

「お坊さん、俺たちが誰だかわかるかい。」

「お、お化けだ。」お坊さんは、背中に寒気を感じました。

「お坊さん、これからなぞなぞを三つ出す。答えられなかったら、食べてしまうぞ。はじめるぞ。」

「足が一本、目が一個。さて誰でしょう。」と一番目のお化けが、

「四角い顔に、歯が二つ、目が三つ。さて誰でしょう。」と二番目のお化けが、

「丸い紙の体の中に明かりが一つ。さて誰でしょう。」と三番目のお化けが言いました。

「助けて下さい。」と、お坊さんは震えていましたが、食べられては困るので、答えを出そうと必死に考えました。

「わかった。」と立ち上がると、大きな声で、

「最初は、傘のお化け。二番目は下駄のお化け。最後は堤燈のお化けで

す。」

お坊さんが言い終わるやいなや、お化けはパッと消えてしまいました。

テキスト：http://www.douwa-douyou.jp/contents/html/douwastory/douwastory2_57.shtml

朗 読（参考）：http://www.douwa-douyou.jp/contents/html/douwastory/douwastory2_57.shtml

でんでんむしのかなしみ

新美南吉

一ぴきの でんでんむしが ありました。

ある ひ、その でんでんむしは、たいへんな ことに きが つきました。
た。

「わたしは いままで、うっかりして いたけれど、わたしの せなかの
からの なかには、かなしみが いっぱい つまって いるではないか。」

この かなしみは、どう したら よいでしょう。

でんでんむしは、おともだちの でんでんむしの ところに やっていき
ました。

「わたしは もう、いきて いられません。」

と、その でんでんむしは、おともだちに いいました。

「なんですか。」

と、おともだちの でんでんむしは ききました。

「わたしは、なんと いう、ふしあわせな ものでしょう。わたしの せな
かの からの なかには、かなしみが、いっぱい つまって いるのです。」

と、はじめの でんでんむしが、はなしました。

すると、おともだちの でんでんむしは いいました。

「あなたばかりでは ありません。わたしの せなかにも、かなしみは い
っぱいです。」

それじゃ しかたないと おもって、はじめの でんでんむしは、べつのおともだちの ところへ いきました。

すると、その おともだちも いいました。

「あなたばかりじゃ ありません。わたしの せなかにも、かなしみはいっぱいです。」

そこで、はじめの でんでんむしは、また べつの、おともだちの ところへ いきました。

こうして、おともだちを じゅんじゅんに たずねて いきましたが、どの おともだちも、おなじ ことを いうので ありました。

とうとう、はじめの でんでんむしは、きが つきました。

「かなしみは、だれでも もって いるのだ。わたしばかりではないのだ。わたしは、わたしの かなしみを、こらえて いかなきゃ ならない。」

そして、この でんでんむしは、もう、なげくのを やめたので あります。

テキスト：<http://www.kamezaki-e.ed.jp/tiiki/gon/denden.htm>

朗 読（参考）：<http://aozoraroudoku.jp/voice/rdp/rd036.html>